

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成 23 年 4 月 22 日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

京 都 大 学 総 長

松 本 紘

事 業 区 分	平成22年度・大学全体計画事業助成		
事 業 名	学生交流協定校への短期学生派遣		
成 果 の 概 要	「成果の概要」以外に添付する資料      無      有(助成者一覧)		
会 計 報 告	事業に要した経費総額	5,000,000円	
	うち当財団からの助成額	5,000,000円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	別紙のとおり	別紙のとおり	別紙のとおり
	-----	-----	-----
	-----	-----	-----
	-----	-----	-----
	合 計	5,000,000円	5,000,000円

## 学生交流協定校への短期学生派遣 被助成者一覧

	所属	学年	性別	留学先大学	留学先国	出発	帰国	助成額
1	総合人間学部	B3	女	マンチェスター大学	英国	2010.9	2011.6	15万円
2	文学部	B4	男	トロント大学	カナダ	2011.1	2011.12	15万円
3		B3	男	シェフィールド大学	英国	2010.9	2011.6	15万円
4		B3	女	マギル大学	カナダ	2011.1	2011.5	15万円
5		教育学研究科	D3	女	チュラロンコン大学	タイ	2010.8	2011.5
6	法学部	B3	男	ボン大学	ドイツ	2010.9	2011.7	15万円
7		B3	男	ユトレヒト大学	オランダ	2010.9	2011.6	15万円
8		B3	女	マンチェスター大学	英国	2010.9	2011.6	15万円
9		B3	女	シェフィールド大学	英国	2010.9	2011.6	15万円
10		B3	女	ペンシルベニア大学	米国	2010.9	2011.5	15万円
11		B2	女	エコール・ノルマル・シュベリウール	フランス	2011.2	2011.6	15万円
12		B2	女	ユトレヒト大学	オランダ	2011.2	2012.2	15万円
13		B2	男	ライデン大学	オランダ	2011.2	2011.6	15万円
14		B2	女	マンチェスター大学	英国	2011.1	2012.1	15万円
15		経済学研究科・経済学部	D2	男	モントリオール大学	カナダ	2010.9	2011.4
16	B4		女	パリ政治学院	フランス	2010.9	2011.2	15万円
17	B4		男	ジョージワシントン大学	米国	2011.1	2011.5	15万円
18	B2		男	ウォータールー大学	カナダ	2011.1	2011.8	15万円
19	理学研究科・理学部	M1	女	ハイデルベルク大学	ドイツ	2011.7	2012.1	15万円
20		M1	男	ユトレヒト大学	オランダ	2011.2	2012.2	15万円
21		B2	女	ジョージワシントン大学	米国	2010.9	2010.12	15万円
22	医学部	B3	女	ウプサラ大学	スウェーデン	2011.1	2012.1	15万円
23	工学研究科・工学部	M2	女	ストックホルム王立工科大学	スウェーデン	2010.8	2011.1	15万円
24		M1	女	コンコルディア大学	カナダ	2010.9	2010.12	15万円
25		B3	男	マンチェスター大学	英国	2010.9	2011.6	15万円
26		B2	女	ペンシルベニア大学	米国	2010.9	2011.5	15万円
27	農学研究科・農学部	M2	男	ユトレヒト大学	オランダ	2010.9	2011.6	15万円
28		B3	男	シンガポール国立大学	シンガポール	2011.1	2011.12	10万円
29		B2	女	ウォータールー大学	カナダ	2010.9	2010.12	15万円
30	人間・環境学研究科	M2	女	オークランド大学	ニュージーランド	2011.2	2011.11	15万円
31		M1	女	ルーバン・カトリック大学	ベルギー	2011.1	2011.7	15万円
32	エネルギー科学研究科	M1	男	ウォータールー大学	カナダ	2011.1	2011.8	15万円
33	地球環境学堂	D1	女	ユトレヒト大学	オランダ	2010.9	2011.6	15万円
34	経営管理大学院	M1	男	ローザンヌ大学	スイス	2011.3	2011.6	15万円
合計								500万円

## 成果の概要 / 京都大学総長 松本 紘

### 【学生交流協定校への短期学生派遣】

京都大学では、海外の19カ国55大学2大学群と大学間学生交流協定を締結し、年間90名程度の留学生を、協定に基づいて1年間程度受入れ、本学の正規課程の学生とともに英語で授業を行う国際教育プログラムの授業や通常の授業を受講させたり、研究指導を受けさせたりしております。

この大学間学生交流協定は、留学生を受入れるだけでなく、学生の相互交流を促進し、学生の短期派遣を推進することをも目的としております。平成22年度も、この制度により留学する学生を支援するため、学生交流協定校への短期学生派遣事業として貴財団に申請し、助成をいただいたおかげで、12カ国・22大学へ留学した34名の学生に渡航費の補助として助成することができました。ここに篤く御礼申し上げます。

助成を受けた学生は、その大半が現在も留学中ですが、各々の協定校で授業や研究指導を受け、単位を修得し、専攻分野の学習、研究を深め、修士論文、博士論文の作成等に貴重な知識を習得しているはずであり、協定校で修得した単位は、各学部・研究科のルールに応じ、本学で習得した単位と同等のものとして認定される場合もあります。また、学習、研究面で成果があることのみならず、留学で得る経験は、国際感覚の涵養や視野の広がりをもたらすなど、人間としても極めて貴重なものとなり、学生の人生にとっても大きな好影響を与えるものになることは、今までに貴財団の助成を受けて留学した者達の報告からみても疑いの無いところであると思われまます。

大学間学生交流協定による留学者数も、平成16年度の32名から、平成22年度には48名と増加いたしました。平成23年度には12月までに出発する者のみで既に39名が予定されております。本件渡航費助成の存在により、経済的懸念により留学を躊躇する度合いが軽減され、留学への応募に結びついていると考えられることも、助成を受けた学生個々の留学成果とは別に、助成の成果ということができると考えております。

留学者数が飛躍的には伸びず、前年度よりも減少する年度もあることにつきましては、協定校の留学担当教職員の話からも感じられる、日本に限らない近年の若者の保守化・積極性の減退化傾向が影響しているやもしれず、本学の関係機構・センターとしても、この状況を踏まえ、より一層の留学促進策を実施してゆきたいと考えております。実際に、平成22年度には、豪州のシドニー大学とニューサウスウェールズ大学に学部生を派遣し、2,3週間、科学英語の運用能力や異文化交流能力の向上に資するプログラムを受けさせる事業を開始し、約60名が参加いたしました。平成23年度からは、この事業を正規の全学共通科目として実施するとともに、カリフォルニア大学デービス校での実習型短期留学プログラムも実施する予定です。これらへの参加学生を主たる対象に、英語検定試験のIELTSを学内で受験できる機会も設けました。

前述いたしましたように平成22年度に助成を受けた学生のほとんどはまだ留学中であ

るため個々の留学成果は帰国後の報告を待つこととなりますが、以上のような意味で、平成21年度以前に助成をいただいた学生、助成をいただいていない学生によるものも含めて、学生から報告のあった留学の成果と言うべき事柄の例を紹介させていただきます。

歴史系の科目など、同じことを学ぶにしても日本とは全く異なる視点に立った学習となり、視野が広がった。Language Partner との語学学習を通じて日本語に対して意識的になれた。

趣味を通じていろいろな国の人との交流ができた。

京大で受けたことのなかった分野の授業で基礎から体系的に学ぶことができた。少人数セミナーでの他国の学生との討論を通じて日本がどう見られているか窺えて興味深かった。講師や TA の熱心な指導を受け英語読解力のみならず文献を批判的に読み思考する力がついた。

最初はフランス語による授業についてゆくのが困難で英語のテキストに頼ることもあったが最後は学期が終わるのが惜しいと思えるくらいになった。

科目履修に加えて研究・実験の機会が与えられたので成果を論文にまとめる予定である。

日本で習う機会の無いディベートの仕方を学び実践することができた。外国の視点から日本の文化についての理解を深められる授業を受けとても刺激になった。

クラス分け試験が簡単であったため能力以上に高いレベルの語学コースに配属されたが変更を願い出ず頑張ってみたところ検定試験に合格できた。

日本と留学先国の関係について考えを深めることができ、その関連で将来の目標をより強く意識するようになった。

日本と異なる仕組みの社会を知ることができ、比較により日本に関する理解も深まった。

世界のトップクラスの大学で学習でき、グループワークにおける現地の学生の積極性、熱心さが大きな刺激となった。

多文化が混在する地域で学び、文化やコミュニケーションについて授業で学んだことを実際に経験するなどして、他文化理解に対する自分の姿勢を見直すきっかけとなった。将

来英語教師になるにあたり役立つ知識やスキルを身につけることが出来た。

エネルギー関係で実際の世の中の問題を科学的な知見から再検討し、それを基に講じ得る対策を検討する内容の科目を受講でき、自分の研究、就職活動や進路に対する大きな指針となった。

留学する前と後では全てのことに対する自分の視点が変わったというほどの影響があった。自分が日本人であることを強く意識するようになり、日本に誇りを持つようになった。

日本語を教える授業の TA としてボランティアができて大変有意義であった。

自分の専門分野を含む学問が非常に体系的に扱われている大学で学ぶことができ、自分の分野の位置づけ、自分に不足しているもの等が新たな視点で見えてきた。